

愛と慈悲

鍋島直樹

「たとえ太陽と月が雲や霧に覆われようとも暗闇は追い払われ、雲や霧の下には光が届いている。同じように知るべきである。清らかな信心が、貪り、欲望、悲しみ、怒りや憎しみの雲や霧に覆われようと、それらに遮られることなく、心の雲を突き抜けて御仏の慈悲があなたを照らしまもるということを」。

はじめに

皆さんこんにちは。只今ご紹介いただきました鍋島といいます。今日は、雨の中、しかも休講で自由な時間にわざわざ足を運んでくださってありがとうございます。先

ほど学長先生からご案内がありましたように、「愛と慈悲」というテーマで、始めて会う皆さんにささやかな話のプレゼントをしたいと思っています。

一九九九年九月末にアメリカのカリフォルニア大学バークレイ校で研究を終えて帰ってきました。今日、皆さんには、向こうで学んだ経験と、ロサンゼルスで行った仏教における愛と慈悲とは何かというプレゼンテーションを日本語で皆さんに届けたいと思います。

僕は鍋島といい、出身は神戸市です。元町駅の東口を出て北へ四五三歩行ったところに家があります。好きな食べ物はミスタードーナツのエンゼルクリーム、ハーゲンダッツのアイスクリーム、一番好きなのは桜餅で、桜の下で桜餅を食べられたら幸せです。皆さんにとっては得体の知れない人物かもしれませんが、聞いて下さい。

一、人間の愛について — 西洋の場合・better half —

まず最初に、人間の愛について考えてみたいと思います。私たちはどうして誰かを

愛と慈悲

求め愛するのでしょうか。これについてギリシャ哲学者のプラトンが書いたお話を紹介したいと思います。プラトン（紀元前四二七―三四七年）は、ソクラテスという哲学者の弟子で、アテネの出身です。彼が書いた著書に『饗宴』があります。その中に愛の理念について、こう書いています。プラトンによると、人間は太古の昔、前世では、大きな球の形をしていた。顔が前にも後ろにもあり、手は四本、足も四本ありました。前に行くこともできれば後ろに行くこともできる。トンボ返りもできるような強い力を持った存在です。

これをご覧ください。これはアメリカ人向けに書いたのですが、ムーランという映画の絵を使ったものです。アメリカのデイズニーは、新しいヒーローストーリーを探し求めています。ハリウッドの映画もそうです。ムーランはそれを中国に探し求めた話です。デイズニーの「ムーラン」は、もともと女性だったのが、お父さんの代わりに兵隊になる、男になりすまして兵隊になる、最後、中国を勝利に導くという女性の生き方を描いた映画です。ムーランにこんなシーンがあります。兵隊同士が殴り合いの喧嘩をはじめます。体も宙に飛び、歯も折れる。そこにチエンポーという男が来て、

こう言う。「どうか落ちついて。私と一緒に唱えて下さい。ナムアミダブツ。Please relax and chant with me, Namo Amida butsu.」デイズニーの映画が念仏を勧めていたのはびっくりしました。それが印象的だったので、こうして絵にしました。

話を戻しましょう。プラトンが言っていたもともと人間は、顔が前にも後ろにもあり、手足が四本ずつある。強大な力を持つようになったので、ギリシャ神話の神ゼウスがアポロンという自分の言うことをきく神を呼んで「人を一人ずつ呼んで半分に切ってしまう」と命じました。切られるのは痛かったでしょうね。昔切った傷がわかるように、その皮をぎゅっと絞って結わえたのが臍へそだということです。以来、私たち人間は半分に切られてしまい、もう片方の自分を探し求めている。これがだれかを愛する理由だという物語です。皆さんはどう思いますか？ この話をするといつも疑問が湧くのです。もし顔が前にも後ろにもあり、背中を絞ったら臍は背中来ると思うのですが……。これをプラトンに質問してみたい。プラトンの言いたかったことは、二人で一つなんです。英語の表現で、自分の大切な人のことを soul mate, best partner, better half と言います。そういう自分にぴったりのもう半分という言い方をしてきま

愛と慈悲

した。これが西洋の考え方です。思えば私たちが誰かを愛し求めるのは、自分に欠けたもう半分の球体、自分にびったりの人を探し求めているからだと思えるなら何となくわかる気がします。

二、仏教の人間観

それでは、ブッダは私たち人間のことをどう考えたのでしょうか。仏教では、二人で一つという言い方はしません。「ライオンキング」という映画でも仏教の悟りの理念が使われています。仏教によると、もともと私たちは皆、違っているけれど、皆で、大きな一つの命を作っていると考えます。お互いに支えあって生かされて、皆違っているけれども、大きな命の一つの輪の中に生きている。We are different, but we are one. ということをお教では大切にします。たとえば仏陀は、こう説いています。

「我は万人の友である。万人の仲間である。一切の生きとし生けるものの同情者である。慈しみの心をおさめてお互いに傷つけないことを喜びとする」。

二人で一つではなく、皆でどこか繋がって支えあって一つの大きな命を育てている。イメージしにくいので縁起のモデルを作ってきました。これはアメリカのデイズニーストアで買ったものです。皆で一つの大きな輪を作っていることを表現したものです。こういう考え方は西洋には少ない。ご存知のように神がEberで、全体を統一する頂点にいて、下に人間がいて、動物、植物がいる。ピラミッド型で宇宙を秩序立てようとする。皆がどこかで支えあい、一つの大きな命を作っているという考え方は少ないわけです。それから、親鸞聖人も同じようなことを言っています。

「一切の生きとし生けるものはすべて、生まれ代わり死に代わりしながら父母兄弟姉妹である」。

と説いています。生きとし生けるものは時間と空間を超えて、家族であり仲間であるという一体感が背景にあります。

ところで僕がアメリカの経験をもとに日本をみると、日本人はいいところもあるが、きめ細やかすぎで、小さな世界に閉じこもってしまうところがあると思います。向こうの人はいろんな民族の人がいるので自分とは異なる民族のことを理解するために、

愛と慈悲

できるだけ相手の目を見て、アイコンタクトで会話します。それに比べ日本人はどちらかというと、胸のあたりを見ていたり、空を見たり、どこか違うところを見ながら話をします。なぜ相手の目を見て話を聞くかというと、全く違う人ばかりだからでしょう。違う人同士が互いに理解する時には、相手への尊敬と自分のことを素直に表現できることが大事です。人をどう評価するかは関係なく、自分がどういう生き方をしていくかを正直にしゃべることが大事なのです。

私はアメリカで、「なぜ十二月には除夜の鐘をつくんですか」「お正月にはなぜお餅をつくんですか」「日本人はなぜ桜が好きなんですか」「夏にはどうしてお盆法要や踊りをするんですか」「仏教ってどういう教えですか」と繰り返し聞かれました。その中には答えられるものもあったけれど、答えられないものもありました。アメリカの人たちは、日本の中にある美しいもの、仏教の中にある尊いものを一生懸命求め聞こうとしていました。

私は、死の問題を研究していたので、UCバークレイのそばのサンフランシスコ校の先生と、スタンフォード大学の医学部の先生と一緒に死の問題を研究しました。そ

の人たちから「日本には日本にしかない美しい文化がある。それをどうか大事にして私たちに伝えてほしい。アメリカにはハリウッドのユニバーサルスタジオもあるし、デイズニーランドもあつてとても楽しいでしょう。けれど、一方でガンを持ち歩き、ドラッグや殺人もあります。そういう中で、たとえば、ハリウッド映画は、日本に生き方を探し求めています。デイズニーが中国にたくさんスタッフを連れて映画を作りに行きます。だから自分たちの文化をもう一度大切に見て下さい」と言われました。僕にはとてもショッキングなことでした。アメリカに行つてアメリカのいいものを吸収しようと思っていたのに、日本の中にこそ尊いものがあると言われたわけです。そんな中で生活をしてきました。

僕は、一切の生きとし生けるものは友だちであるということをアメリカに行つて深く感じました。目を見て互いに話をするとかEメールです。僕の中で心強かったのは、英語のメールばかりが入ってくる中で、時々日本から日本語のメールが届くことでした。僕の教えていた学生がJフォンを使ってアメリカにメッセージを送ってくれた。例えば「今日はバイトでへこんだ」「へこんだ」の意味を知らなかったのだ

愛と慈悲

「何がへこんだ？」「私がへこんだ」「どうへこんだ？」と、それだけで何回もメールをやりとりしました。へこんだというのは、落ち込んだとか、傷ついたという意味だと知りました。マツキーが大麻で捕まったというメッセージから、先生、発表がんばって、というメッセージまで、いろんなメールを受信しました。僕は、遠く離れていても、どこかでつながって、皆互いに支えあい、まわりの人々が僕のことを和らげてくれるということを感じました。

さて、皆さんには、どっちがフィーリングに合いますか？二人で一つだという考え方が合うという方は手を挙げてみて下さい。数人いらっしゃいますね。動物も自然も人間もそれぞれ違ってはいるが、皆で大きな一つの宇宙を作っているという考え方に共鳴できるという方。たくさんの方が手を挙げました。きっと仏さまも喜ぶことでしょう。

実は、この話をしたのは、プラトンが生まれたのは紀元前四二七年。ゴータマ・ブツダが生まれた説はいくつかありますが、有力なのは紀元前四六三年。ほとんど同じ時代の人です。そういう古い時代の考えが私たちの心の中でどこかで生きているのは

不思議ですね。

皆さんが、今、後者の方に手を挙げてくれたので、一つ紹介しましょう。アメリカでこの仏教の悟り、すなわち、互いが支えあつて生かされているという思想を縁起と言います。英語では *interdependence*、相互依存です。また *interdependent-co-arising* 相依相生ともいいます。インターディペンデンスは、今アメリカでは、新しい流れで強い言葉です。「インディペンデンス・デイ」という映画では、UFOがやってきたので大統領が立ち上がってやつつけるという話がありますね。このインディペンデンスは、独立 (*independence*) という意味です。これに対し、新しい言葉としてインターディペンデンスを重視するのです。七月八日の独立記念日を、一部の人たちはインターディペンデンスデイと呼ぼうとしています。つまり、独立というのは自分の自由を勝ち取ることだけど、そこには殺戮があり、人を傷つけて、どちらが強いか弱いかを決めるという戦争を伴ってしまふ。本来、私たちの世界はどこかで支えあい、違う立場を認めなければいけない、それを仏教が提起しているということを、ハーバード大学の先生方が言っていました。そんな美しい東洋の知恵、自然も人間も一緒

に生きていこうという知恵を、皆も心に温めてほしいと思います。

二、仏教における愛とは

「愛」に話を戻しましょう。仏教においては、愛について、美しい面と苦しい面の二面性を説いています。まず美しい面は、愛を「敬愛」「喜愛心」という言葉で表現します。愛の基本は尊敬であり、相手のために何か捧げたい、してあげたいというのが美しい面だということです。一方、愛は永遠であるとは言いません。苦しいものであると、同時に説きます。苦しいことの理由の一つは、愛が移ろいやすいからです。どれだけ互いに求めあっても、相手の気持ちが変わってしまったら、もっと辛い場合は相手が死んでしまつて、別れてしまいます。

僕の恩師は信楽峻磨という先生ですが、その先生が結婚式の披露宴でされるスピーチがあります。彼は七〇歳を越えた、前龍谷大学学長です。結婚式の披露宴は華やかだ雰囲気、普通のスピーチなら、幸せは二人で二倍にして、苦しみは二人で半分

するとか言うでしょう。しかし彼はこう言います。「人間は所詮一人ぼっちである」と。披露宴会場は静まりかえります。結婚したばかりの二人を前にして、「一人で生まれ、一人で死に、一人で去っていく。これが人生の現実だ。そのことをどうか、はじめに噛みしめてほしい」と。いつもその話を先生がすると、華やいていた雰囲気が一瞬にさめて、水を打ったように静まりかえり、出席者の食べる手は止まり、お酒を飲むグラスを置きます。新郎も新婦も、話はどうなるのかと思つてうつむきます。すると先生は続けてこう言うのです。「私たちはこの世にたった一人で生まれ、たった一人で死んでゆかなくてはいけないことを忘れている。本来どこかで一人ぼっちだということ、一人でしか生きていけない寂しさをもっていることをお互いに理解しあつたなら、少しは相手を思いやることができるだろう。いつまでも生きられると思うな。いつか終わりがあると思うからこそ、そこに優しさが生まれ、相手を許す心が育まれてくるのだ」と。僕には、とても身に沁みた言葉です。愛は永遠と歌っているけれど、本当はそうではない。

パークレイでカソリックの神学者に会つて、こんな話をしました。カソリックで

愛と慈悲

はきちんとした儀礼を通して結婚式をします。セックスの仕方から避妊の仕方まで全部教えてくれます。そして、中絶や離婚はだめだという話をした後で結婚の契約をする。ところが実際には、アメリカ社会で四〇～五〇%の人が離婚してしまいます。多いのは二〇代、次が六〇代。その神学者が言うには、神の前で契約した二人は一度離婚すると死が二人を分かつまでという契約を破ったことになるので教会に来られなくなる。来ても今まで一緒に食べていたパンの一切れやワインを飲めなくなる 것이라고言われました。彼に、「仏教ではどうですか。離婚した悲しい別れをどう受けとめるのですか」と聞かれました。僕はこう答えました。「日本にもたくさん離婚があります。だけど離婚したからといって、また仏の前での誓いを破ったからといって、離婚した後にお寺に行けないということはありません。一人でもいいし、二人でもいいし、それぞれの思いを持ったまま行くことができます」と。するとその神父さんは「そのような寛容な教えを私たちも持ちたい。仏教の良さを学びたい」と言われました。アメリカは、キリスト教だけでも二〇くらいの宗派があります。それぞれの宗派で、それぞれの倫理規定を守っている人たちは同じ価値観を持って生きることになっ

て仲がいいのですが、一度契約を破ってしまうと教会に戻って来にくくなる。そういうこまやかな規定を設けるのが、アメリカの善と悪についての考え方です。これに対して、愛が永遠だと誓ったはずが無常だった時、受けとめる世界が仏教にはあります。それから、愛は苦しいものであるもう一つの理由は、愛がエゴイステイックなものであるからです。私たち人間はどれだけ相手を思っても、いつもそれ以上に自分を可愛いく思っています。一つだけ例を挙げましょう。あるお母さんが子どもがほしくて、自分の卵子と夫の精子を体外で受精させます。仕事を続けたかったそのお母さんは、別のお母さん（自分の体では産まないで、代理の別のお母さんに産んでもらう女性を、代理母といいます）のおなかを借りて受精卵を着床させ、赤ちゃんを産んでもらいました。そうして生まれた赤ちゃんには、障害がありました。すると受精卵を提供したお母さんは「その子は私の子どもではない。私の家系にそんな子どもが生まれるわけがない。あなたは私が受精卵を提供してから、誰か男の人と交渉を持ったでしょう」と言ったのです。代理母の女性も、受胎後に性交渉があったことを認めたため、この赤ちゃんの母親は誰なのかをめぐってドロドロとした裁判になりました。とうとう最

愛と慈悲

後は赤ちゃんのDNA鑑定をする。その結果、卵子を提供したお母さんの子どもだと判明します。ところが、そのお母さんは「遺伝的に私の子どもであっても、この子どもを育てることはできない」と言って赤ちゃんの受け取りを拒否しました。この物語は何を意味しているかわかるでしょうか。仕事を続けたいけれど、子どもがほしかった。ところが生まれた子どもが自分が願っていたような子どもではなかった。すると、その子どもを受け容れられない。すなわち、子どもが可愛いのではない、子どもをあやしている自分が可愛いわけです。

私たちの愛は、自分を先に優先してしまうところがあると仏陀は教えました。まさにこのことです。このような自己優先の愛を「我愛無明」といいます。私を愛するが故に、その愛は暗く迷っているというのです。自分がかわいそうだから相手を求める。自分の我が儘が、常に先に立ってしまうのが、愛の本質だと仏陀は言うわけです。それで、古来から愛というものは仏教では、とても美しいものでありつつも、一方で苦しくて、自分のことばかり考えてしまう我が儘なものであると伝えてきたのです。僕が親鸞聖人に深く共感するのは、彼の書物にあるこういう文章です。「悲しきかな、

愚かな親鸞よ。私は愛という欲望の広い海に沈没して、名誉や利益の山に惑い、悟りの仲間に入ることを喜ばない。真の悟りに近づくことを楽しいと思わない。そういう私がとても恥ずかしい」と。彼は正直ですね。六〇歳近くになって書いたと言われる『教行信証』のなかに、「私は自分を可愛いと思う愛に溺れている」と正直につづっています。愛は永遠だということは書いていない。そういう親鸞聖人の自分のありのままの姿を受けとめようとしたところに共感します。もし本当の愛があるとすれば、「ごめんなさい」ということです。どれだけ思っても自分のことばかり思って、あなたを傷つけてしまう、本当にごめんなさいと気づくことが、真の愛であると思うのです。

四、慈悲 — 四つの美しい心 —

さて、こういう愛という言葉に代わってあるのが、仏教では「慈悲」という言葉です。仏教では慈悲という言葉をさらに広げて、四無量心、四つの美しい心と言ってい

愛と慈悲

ます。それを皆さんに紹介しましょう。ロサンゼルスで講演をした時、ある方からアドバイスを受けました。「アメリカ人は漢字に弱いので、アメリカで軽蔑されそうになったら、漢字を書けばいい。また、折り紙など日本の文化をアメリカ人に示すことはとても大切です」と。それで講演のために墨書したのがこの字です。

まず一番目は「慈」。「慈」はマイトリイというサンスクリット語が語源で、「優しさ、ベストフレンド、友だち」という意味です。どんな障害があっても思いあえるような心、壁を越えてつながりあえる友、これが慈という意味です。deep friendshipと言ってもいいでしょう。慈という漢字から出来た字に、磁石の磁という字があります。どうしてこういう風になったかわかりますか。昔の日本の科学者が、マグネットを見て考えた。N極とS極はどれだけ引き裂こうとしても引つつきあおうとする。紙を隔ててもくつつこうとする。それでそのマグネットをお慈悲の石だと考えたのです。どれだけ妨げても引き合おうとする。マグネティックラブ、磁石の愛とっていいでしょう。

僕たちが生きていることの実感があるのはどういう時でしょう。誰かとつながりが

あると実感できた時が生きていると思うのではないでしょう。苦しい時、うれしい時に携帯に電話がかかってきたらうれしいでしょう。誰かとのつながりがあるから、生きているという実感がある。

次は「悲」です。悲は、カルナという言葉からきています。仏教語では *compassion* と訳されている。気持ちと一緒にすることです。相手が悲しい時、そばで、黙って肩を抱き寄せる。何もできないけど、相手と一緒にいることがやがてその相手の苦しみを抜くことになる。

三つ目は「喜」です。ムディターというサンスクリットからきていて、*joy together*、一緒に喜ぶという意味です。正しくは「随喜」という表現があります。うれしい時、そばで「よかったね」と一緒に喜べる人は、喜んでいる本人よりも十倍の徳がある。もし同じ宝くじを買いにいつて、友だちが当たって、自分が外れたらどうしますか。「よかったね」と言つて、心の中で悲しむでしょ。仏教ではそうではないのです。仏教では一緒になって喜ぶ人は本人よりも十倍美しい。そういう人に皆さんがなつてもらえれば世界は変わると思います。自分のことだけでなく、相手の喜び

愛と慈悲

を喜ぶ。女性にはそういうところがありますね。男は話を聞くのがへたで、冷たいところがあるけれど、女性は一緒になって悲しんだり、喜んだりできるところがある。ただし実際は、友だちに彼氏ができたと言うと「よかったね」と言いながら、心の中で「何言ってるの!!」とか思ったりするのでしょーうけれど……。

こういう経験がアメリカでありました。僕はアンコが好きなので、アメリカでも食べたくてしーうがなかった。ある日、ディビッドという友だちが鯛焼きを買ってきてくれた。それがとてもおいしくて、以来、ジャパントウンのその鯛焼き屋に毎週買いに行きました。ある日のこと、いつものように長いラインを待った後、僕の前の人が五つくらい買ってちーうどなくなった。その人が僕に「I'm sorry.」と言ってくれ、思わず「You are lucky.」と笑いながら言ったものの、心の中では泣いていました。でも仏教は違うのです。もしその時に一緒になって喜んであげられたら相手も嬉しいし、何よりも一緒になって喜んでいるその人の方が十倍の徳があると説いています。

最後に、四つ目の心は「捨」。ウペクサーというサンスクリットで、僕たちが自分の思い、私、あなたという執われを取り払った時、消えた時、本当の平等な心が現れ

る。僕たちはいろいろなことに執われていますが、それが消えた時、本当に人と繋がることができる。アタッチメントというのは見事な表現で、自分が何かの主観にひつついている、自分の執着に接着している。だから、相手の気持ちが見えない。それがとれたら自由になって、自分の心も相手の心もよくわかるようになります。以上が、四つの美しい心です。仏教では「愛」という言葉の代わりに、この四つの美しい心、「慈悲」という言葉を強調しています。

おわりに

最後に、今日の話をまとめるにあたって、仏陀の愛の話をしたいと思います。それを真珠の物語によせて皆さんにプレゼントしたいと思います。これはアメリカ人用に作った折り紙です。あこや貝と思っして下さい。どうして真珠が出来るかの物語を紹介しながら、仏の愛について、少し理解してもらえればと思います。

伊勢湾にあこや貝を養殖して、真珠を作るミキモト真珠島があります。きれいなと

愛と慈悲

ころです。ロマンチックな気持ちになります。思わず真珠を買いそうになりますね。真珠ができるまでの物語を、皆さんはご存知でしょうか。まず真珠をつくるために、あこや貝の口を少し開いて、核となる貝のカケラを差し込みます。普通は、異物が入ったら、貝は、ピュッと勢いよく水を出して、その石ころを出すのだけれど、柔らかいピンクのひだの奥に人間がピンセットで貝のカケラを差し込むので、貝はそのカケラを吐き出そうと思っても、吐き出せない。しかたなく真珠は、この石を自分のなかに抱きしめます。そして、一―三年の間、穏やかな水の中で、そのカケラをこれ自分の貝殻の内側の真珠色と同じように、少しずつ真珠色の分泌液で包んでゆくのですね。数年後、あこや貝を引き上げてみると、この貝のカケラが見事な真珠になっています。これが真珠のできる物語です。しかし、この話はあこや貝の立場からすると違う見方ができます。あこや貝にとってかけらは、異物です。異物を挿されたら吐き出したい。けれど、彼女は、カケラを吐き出さずに抱いて、遂には、自分と同じ色の真珠にする。一九九九年はとくに真珠ができなくて、すべてのあこや貝のうち、五%しかできなかったそうです。すべてのあこや貝がカケラを真珠にできるわけではないのです。あこ

や貝の二五％は死んでしまいます。多くのあこや貝には元々の貝石が残っているだけです。わずか二五％のあこや貝に真珠ができるそうです。あこや貝にとって真珠は命がけの涙です。

ところで先ほど紹介した「悲」、カルナの原意は「呻^{うな}き」という意味です。悟り、休らいでいるはずの仏が呻いている。なぜ仏が呻いているかわかるでしょうか。自分とは異質の、苦しんでいる者を、角を持ったものを何とか抱きしめようとするから仏は呻くのです。真珠と同じです。振り返ってみて僕はいつも思うのです。僕は今、美しいホールでこうして皆さんの前で話をしていますが、本当の僕はたくさん角を持った石ころのような存在です。元気がいい時、食べた後は機嫌がいいけど、仕事忙しい時はイライラして、相手を傷つけてしまう。うそも平気でつく。そんな悪いことばかりしてきた僕だけれど、繰り返し仏教の話を聞くうちに少しずつ自分の尖ったことがわかってきて、それを和らげてくれるあこや貝に自分が包まれている、と感じることがあります。仏は絶対に石ころを捨てない。何とか抱きしめて、少しずつ少しずつ着実に美しい真珠にしようと思います。真珠になるのは奇跡ではない。休講の時間に、

愛と慈悲

しかも今日のような雨の日に、この会場に足を運ぶ。そんな繰り返しがいつか必ず皆さんを真珠にしてくれます。今日皆さんは、いろんな動機でここに来られたと思いますが、そのままでいつか確実に真珠になります。

僕がいつも言うのは、こういう仏教の話を聞くホールは、あこや貝そのものだ思えばいいと。今はまだ、尖った角を持っても、あこや貝に包まれて、必ず美しい人間になってゆくはずです。確かに誰かとどこかでつながっていて、皆が友だちだと思える。誰かが悲しんでいる時に一緒にあって、そばにいてあげる。うれしい時には「よかったね」と一緒に喜ぶ。そして、自分のとらわれの主観を全部捨てていく。こういう四つの美しいまことの慈悲が心のうちから表われたとき、人は真珠のような深くて優しい輝きをもつのだと思います。そんな美しい人間に、皆さんもどうかなっていただきたいと思います。

話は尽くせないですが、今日は貴重な機会をいただいてありがとうございました。以上で話は終わります。

——二〇〇〇年六月二七日——